

審議会等会議録

審議会等の名称	第4回文化振興ビジョン検討懇話会
開催日時	令和元年10月25日（金曜日）10：00～11：30
開催場所	山口市役所3階 第2委員会室
出席者	前田哲男（会長）、松原清（副会長）、中野良寿（専門部会長）、津田隆、大和保男、広田早苗、鈴木啓二郎、河野康志、中原豊、山本有希、時乗順一郎、松前了嗣、米本太郎（敬称省略、順不同）（13名）
欠席者	斎藤郁夫、足立明男、大庭達敏、磯村勇（敬称省略、順不同）（4名）
事務局	交流創造部：有田部長、古賀参事 文化交流課：上野課長、神足主幹、竹内主幹、二段副主幹、半田主事（7人）
議題	・山口市文化振興ビジョン素案について
内容	<p>次第に基づき以下のとおり進められた。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 部長挨拶</li> <li>2. 事務局挨拶</li> <li>3. 会長挨拶</li> </ol> <p>&lt;審議&gt;</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>4. 山口市文化振興ビジョン素案について 配布資料「山口市文化振興ビジョン素案 第1章から第3章まで」事務局から説明の後、会長の進行により審議に入った。</li> </ol> <p>&lt;会長&gt; 事務局から説明があったが、何か御質問等があればお願いします。</p> <p>&lt;委員&gt; 今回の資料は、今後10年を考えるビジョンとして作られ、統計的な部分としてアンケートは出ているが、山口市の助成金交付の実績の推移を付録として載せていただくと、目指すべき姿が想像しやすいかと思った。文章や写真以外にも、数値があれば想像しやすいと思った。</p> <p>&lt;事務局&gt; 例えば、助成金の推移とは、文化振興財団などの文化事業に関わる助成金などを抜粋する形でよろしいか。巻末で載せられたらと思う。</p> <p>&lt;委員&gt; P8の5行目の「地域拠点当」は「等」の間違いかと思う</p> <p>&lt;事務局&gt; 修正させていただく。</p>

<委員>

P20「個が耀き」(3)の「個」の説明の中で、歴史、文化、自然、中也、大内文化等の中にYCAMだけ施設名で書かれている。揃えるのであれば、YCAMのところをメディアアートという書き方にしたほうが良いのではないかと考える。そもそもメディアアートにとどまることなく、YCAMというものが一つのジャンルとして独立しているのかもしれないが。その辺りのお考えをお聞かせ願いたい。

<事務局>

「個が耀き」の「個」には、人や地域のほかに、本市の固有の文化や施設など、それぞれの「個」が光耀くという意味を込めている。ここでは「個」のイメージを伝えているもので、YCAMという表現にこだわっているわけではない。

<委員>

YCAMをメディアアートという言葉に置き換えても問題ないということでしょうか。

<事務局>

問題ない。

<委員>

先ほどの委員の御意見にもあったように、施設名とジャンル名が混在しているところが気になる。施設名を出すのであれば、赤れんがや伝承センターなどを別にまとめて書いたほうが良いのではないかと考える

<委員>

展覧会をするときに、自分はアーティストという立場で参加しているが、その際に打ち合わせなどの企画が必要となってくる。運営や企画をしてくださる人材の育成を重点プロジェクトの中に置いてほしい。今後そういった取組を充実させることは出来ないかなと考える。アーティストとして作品を制作しながら企画運営を行うことは難しい。先日、YCAMへ伺ったが、YCAMの事業体系としては、インターラボとアーティストは同じレベルで議論をしっかりと行い、企画を作っていく形となっている。制作するアーティストも大事だが、支える側の受け皿になる基盤を作ってくれる人が重要だと実感している。海外の例では、アーティスト・イン・レジデンスというプログラムの他に、キュレーター・イン・レジデンスというプログラムもあり、キュレーター・イン・レジデンスが充実している国では多様性のあるプログラムを行っていると感じている。異分野をつなげていけるような人材がこの先10年は必要になると実感している。また、過疎地域・少子化の問題も出てきているが、YCAMをはじめ、テクノロジーのアーカイブ化を行っていくべきではないかと考える。

<委員>

素案を読ませていただくと、自分が言いたいことがすべて集約されていると感じた。ある意味、この素案の内容は、理念・理想であったり、もっと深く言えば願望であったりする。理想、願望は良いものだが、実際仕事をしてくれる人がいるのか、芸術などに思いを馳せてくれる人がいるのかどうか、現実的に芸術で仕事ができるのかどうかを考えた時に、今はそういう人が求められてはおらず、技術者がいないのも現状。

以前テレビで、デザイン分野に進もうと思った人物がデザイン学校を卒業後、会社に入ったが、月給が少ないため、44歳になり仕事について考え直し、行政の試験を受けたが、受験者約5000人に対し、3名程度しか採用がない現状を放送していた。

いくら芸術的感性を持った人間を育てたとしても、10年先はどうか、ロボット時代になったときに芸術で仕事をするのが出来るのかと不安になる。例えば、ペットボトルは便利だが、ペットボトルが出来たころから生活空間が狭くなったと感じる。ペットボトルが登場する前は、自分の作品は東京近辺においても高値で売れていた。ペットボトルの登場以降、生活空間が狭くなってしまったと思う。また、車はアートより斬新であり、パーツの組み立てなど、芸術的に見ても、素晴らしいものであると思うが、車や新幹線などの登場によって生活空間が狭くなったと感じる。

テレビで、今の家を見てみると、リビングルームをいくら大きく作っても作品を置くのは1か所のみである。今までは、作品を何点も買って、押し入れに作品をしまうことが楽しいと思う方が多くいたが、今はそうは思わない。ペットボトルができてから、いくら器を展示したとしても、器を買いたいと思う人は減ったと感じている。

冒頭でも申し上げたが、今回の素案は申し上げることはないほど、理念的にも素晴らしいものであると思う一方で、願望もあつてのことである。委員の皆様と考えていけたらと思っている。

<会長>

10年後、現時点では想像できない時代になっていると思う。今までの社会の動きを見れば、今後10年で、かなり変化するのではないかと考えている。そうした中で、山口らしさをどのように出していくかが今回のテーマであると考えている。人材育成の件も大事な話になってくると思う。この10年の変化をどう考えるか、また、人材育成をどう考えていくかなどについては、第4章での重点プロジェクトの説明を受けた上で議論してまいりたい。

<事務局>

先ほどの委員から御意見をいただいた「支える人材」の専門的人材育

成については、確かに重要だと考えている。今までも、大学や高等専門機関などと連携し、ファシリテーターの養成や、専門的知識向上に向けてのワークショップを開催している。このように、ファシリテーターの養成や専門的知識の向上を目指す取組は、本市の文化芸術を支える人材の育成にもつながると考えているため、P40(2)次世代の芽吹きプロジェクトの中の「②次世代を担う想像力豊かな人づくり」において、今後も取組を進めてまいりたいと考えている。

また、先ほど委員がおっしゃたように、大量生産大量消費の時代へと時代が変化する中で、日常の生活を楽しむ暮らしが少なくなっていると感じている。本市としては、市民の身近に美しい器やアートなどがあり、お茶などの文化を楽しむ暮らしがあることが幸せだと感じる未来を作ってまいりたいと考えている。

以後P37～第4章を資料に沿って説明。

<会長>

事務局から説明があったが、何か御質問等があれば願います。

<委員>

今回の素案は、よくまとめてあると思う。山口市の文化は多岐に渡っており、いくつかのジャンルに絞ってはいけなさと考えている。幅広い文化芸術のジャンルに対して行政的投資も含め、その環境を維持することが大切だと感じている。一方で、伝統工芸、無形文化財を維持していくことは大変だと思うが、それらを支える仕組みも、このビジョンではうたっているため大変良いものになっていると感じる。

先日まで、山口県立美術館で開催された絵画展では、多くの方が来館されていた。来館者は美術館を出た後、次から次にまちへと出向き、喫茶店などを利用していただいたため、今回は大変良いものであったとの評価を聞いている。このようなものが地域経済を潤わす循環になるのだと強く感じた。

このように山口市に、美術館やYCAM、一年半後にオープンする小郡のメッセがあることは、大きな財産であると考えている。

最近では、新山口で会合を行う人が増えてきており、会合を開くために予約を取ろうとすると予約できない状況が続いている。新山口のホテルの関係者に聞いた話だが、新山口に泊まりに来た人で、すぐには帰らない人から、湯田温泉に寄ってみたい、五重塔を見てみたいという声が増えてきているとのこと。山口市の文化、芸術、湯田温泉を体感してみたいという声が大きくなってきている。一年半後にメッセがオープンすることにより、この勢いがもっと強くなるのではないかと考える。

文化に限ったことではないかもしれないが、山口市に来られた方が、薪能なり神楽が見られるなど、山口市の情報を受け取れるようにするこ

とは必要である。外から外貨を獲得するには良い方法であって、これらを繰り返し行うことにより、財政的基盤になるのではないかと考える。すべてを行政に頼るのではなく、市民一人ひとりが、市外から来られた方が行きやすい環境づくりに取り組むことも大切だと感じる。

これらが伝統や文化を支える大切な柱になっていくのだと感じた。

<委員>

今後テクノロジーの発達により、デジタルコンテンツを利用する機会は今まで以上に増え、情報化社会が進んでいくと思う。そういった中で、イベントが行われていることを周知する、または知るためのツールが大切になってくる。今回の資料を見て、こんなにも様々な事業があったのかという発見や、自分が見たことのない写真が沢山あり、そのような情報を一つの場所にまとめて、デジタルコンテンツとして見られるようにするなど、つながりを持たせていけたらと考えている。

自分が山口に来た時に、大内地域の地図が多くあり、同じような地図に違う情報が少しずつ載っていて、紙媒体として多く持っていかなければならないことがあった。それらを関連付けて、イベントの企画や情報をインターネット上で、簡単に見ることができるようにする。そういうものも重点プロジェクトとしてまとめられたらと思う。

<事務局>

国内外に向けた情報発信力の強化として、P 3 4「SNSを活用した情報発信」を行っていきたいと考えている。また、文化の関係だけでなく、新山口駅から人が波及するような情報発信の取組を進めていきたいと考えている。参考になるサイトがあれば教えていただきたい。

デジタルコンテンツのアーカイブ化についてもP 3 4において示しており、そうした取組についても今後進めていきたいと考えている。情報提供をお願いしたい。

<会長>

先ほどのYCAMについて、活動なのか施設名称なのかという問いがあったが、YCAMと記載した場合、YCAMで行われる行事であり、ジャンルであると一般の方が解釈されているのだろうか。

<委員>

自分はYCAMと書いてあれば、施設名だと判断する。P 1 6「⑦国内外の交流の推進とネットワークづくり」の中でも「山口情報芸術センター（以下、「YCAM」）」と書いてあり、一般的には施設名だと判断されるのではないかと思う。

<事務局>

「個」にはいろいろな思いを込めている。歴史、文化、自然、景観の他に、YCAM、中也、大内文化を書かせていただいております、本市の個

性あふれる文化として表現している。ここには文化、歴史、自然、人、施設、21地域といった意味を込めているところであるが、書き方については、今後検討していきたい。また、YCAM、中也、大内文化を、本市の個性あふれる文化としてまとめることについても御意見を頂戴したい。

<会長>

残念なことに、市内においては、YCAMの活動の多くが知られていない状況だと感じる。こちらの思いとは違った受け取り方をされる場合もあるため、検討していただきたい。重点プロジェクトについてはこのまとめ方でよろしいか。

<委員>

P42～43のユニークベニューという言葉については、何か分からないため、注意しながら文言を選んでいただきたい。

また、P43はP42を図式化してまとめているのだと思うが、どういう視点で7項目に絞ったのか。文学という言葉がいきなり出ることや、市役所周辺についてはどの辺りなのか分からないため、工夫が必要と感じた。

<事務局>

P43の図については、賑わい創出に向けた文化的価値を高めるために、資料にあるような取組を行ったらよいのではないかという考えを反映させている。例えば、市役所周辺については、今後本庁舎の整備が進んでいくため、点ではなく面での取組において、広がりを持たせることを考えた場合、本庁舎だけで考えるのではなく、美術館や博物館などを一体的に捉えて、パークロードの入口で文化的空間を作っていけたらという思いもある。

様々な資源を観光と賑わい創出につなげるにはどうしたらよいのかも含めて、本日御意見をいただき、次回懇話会で御提案させていただけたらと考えている。先ほどの、委員の御意見にあった情報発信については、賑わい創出プロジェクトにおいて記載をしているが、全体を通して賑わいの創出につなげられるよう取組んでいきたい。

<会長>

P43の図に関して、御意見、御提案があればお願いしたい。

<委員>

第5章「推進にあたって」の「推進主体の考え方（方向性）」については重要な内容だと思うが、途中で文言が切れている。これは何かあるのだろうか。

<会長>

第5章については、まだ説明を受けていないため、事務局より説明を

願います。

<事務局>

P 4 4 ~ 第 5 章を資料に沿って説明。

<委員>

P 4 3 の図の中に、市民との協力によって賑わいを作り出すとあるため、第 5 章にそのような内容で簡単なものがあつたら分かりやすいかと思う。

<委員>

P 2 0 の次世代が芽吹くの中の、次世代のイメージの 1) 人材の「文化を支える人」について、ここにある「人」は何を支えるのか。第 5 章の説明を聞いて、この部分につながってくるものと思ったが、この記述に疑問がある。

<事務局>

「文化を支える人」についてもいろいろな思いがある。祭りを支える人材、企画する人材といった、地域文化を支える人材という考えもここに含めた記述である。

<委員>

「文化を支える人、専門的な人…」という書き方の順番もあるかと思う。

<事務局>

順番等を検討し、修正したい。

<委員>

P 3 3 「国内外の交流の促進」について、(文化振興ビジョンからは外れるかもしれないが)「国内外の都市との交流を促進し」と書いてある。これには人との交流も含まれると思う。交流するにはどのようにして山口市に来てもらうのか考えなければならない。山口市については、J R 山口線、バス、自家用車を使用しないと中心部に来ることが出来ない。新山口から山口に来るバスについて便が少ないという声がある。来訪者にとって、新山口から山口へのアクセスを工夫できないかと思う。

また、S L のことについても記載していただけたらと思う。

<委員>

P 4 4 について、この場でどう推進していくかを考えるということだが、人口などの統計的なものを図示していただきたい。文章では内容が分かりづらいものもあるため、図示は必要だと考える。

<委員>

P 4 4 推進にあたっての中に、協働という言葉が見当たらない。協働という言葉は 1 5 年以上前から言われており、市民や文化団体などの力は大変重要であると思う。協働という言葉を入れてほしい。

<事務局>

本ビジョンの実施にあたっては、市民や地域、文化団体の皆様の協働が必要であると考えている。

<委員>

後段の推進主体や考え方の方向性について、違和感があったため再度言わせていただいた。

<委員>

文化の中心が行政ではなく、市民が主体であるということは理解できるが、その推進や支援の中身が重要だと考える。

秋吉台国際芸術村などの県の行財政改革を見ていると、切り捨てる面が強いと感じる。山口市がそのような方向に進まないようにしていただきたい。体力のある文化団体もあるが、中には活動が縮小に向かっているとこもあり、こういった団体には手厚い支援がないと、消滅してしまう。その辺りは柔軟に思いきって、手を貸していくことも大切だと思う。

<事務局>

文化は政策の柱であると考えている。文化団体の会員数の減少や伝統工芸などの担い手不足などもある。行政が支援していくことは必要だと考えている。

<会長>

(委員(専門部会長)に対して) 専門部会で議論された立場から、この方向性として問題ないか。

<専門部会長>

専門部会では様々な意見が出たが、今回の資料は部会の意見をうまくまとめていただいていると感じる。未来志向についても対応しているため、良い方向であると考えている。

<会長>

その他について、事務局より説明願いたい。

5 その他

<事務局>

今後のスケジュールについて、次回第5回懇話会は、12月中旬の開催を予定しており、最終案をお示す予定。2月に執行部説明会、パブリックコメントを実施、3月にビジョン策定予定としている。

以上で会議を終了した。

会議資料	<ul style="list-style-type: none"><li>・第4回文化振興ビジョン検討懇話会次第</li><li>・資料： 山口市文化振興ビジョン素案</li><li>・別紙： 21地域写真・用語の説明</li></ul>
問い合わせ先	交流創造部 文化交流課 TEL 083-934-2717